

2019（令和元）年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告

研究のねらい

『主体的・対話的で深い学び』をかなえる授業と評価
～ポートフォリオ・多面的評価の活用と課題～

2020年度から順次実施される新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現とその視点に立った授業改善が求められている。学びの方向性が思考力・判断力・表現力の測定、多面的・総合的な学習プロセス評価の重視へとシフトしていく中で、生徒が協働的に学び、学習活動を振り返り、学びの記録を蓄積するための一つの手段として、ポートフォリオの活用と電子化が注目を集めている。

ポートフォリオや評価の主眼は、生徒が学びのプロセスを振り返り、キャリア形成と生涯の学びにつながるよう活用されることである。教員にはこれらのノウハウを共有し、教科の枠を超えて協力することで、新しい学びの具現化に向けて指導力を発揮してほしい。

2019年度の当部会は、子どもたちの未来を見据えた授業づくりとポートフォリオや観点別評価をはじめとする多面的・総合的な評価に焦点を当て、プログラムを企画した。黒上晴夫・関西大学総合情報学部教授の基調講演、東山中学高等学校の授業・施設視察、分散会での討議を通して、今回の教育改革で提起された深い学びをかなえる授業デザインと評価、私学ならではのカリキュラムのあり方を探究していく。

会 期 2019（令和元）年6月21日（金）

会 場 [東山中学高等学校](#)（京都府京都市左京区永観堂町51）

参加者数 113名

参加対象 理事長・校長・副校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員

基本日程

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30	30		30	30	15		10 45		50
6月21日（金）	受付	開会式	基調講演		昼食	学校紹介	授業視察	全体会	分散会	閉会式

研 修 内 容

■ 基調講演

演 題 「教育改革をとらえる視座 ～資質・能力の育成～」

講 師 黒上 晴夫 関西大学総合情報学部総合情報学科 教授

■ 学校視察 東山中学高等学校

◇ 視察校代表挨拶／学校紹介／授業視察／施設見学

■ 分散会 『主体的・対話的で深い学び』をかなえる授業と評価

学校紹介（東山中学高等学校）

東山中学高等学校は、明治元年(1868年)知恩院内に第七十三世名譽学天大僧正が学問所を設けたことが始まりであり、2018年に創立150年を迎えた。当時は幕末の混乱期にあたり、「世の中が混沌とした時こそ学問が必要である」と考えられ、以来、「真理」を求める仏教の本質を拠り所としながら、浄土宗祖法然上人の教えに根ざした人づくりを実践してきた。法然上人の教えは、自律的な人格を形成し、セルフ・リーダーシップ(自ら情熱と主体性をもって行動し、夢を実現させ目標を達成する力)を育む東山の教育に深く息づいている。教育目標であるセルフ・リーダーシップ育成のために、3つのオリジナルツール(『未来を築く10年カレンダー』、『夢をかなえる生徒手帳』、『歴史を創る三年日記』)を導入し、計画性の習慣化を図っている。また、自ら考え、答えを導く力を引き出すアクティブ・ラーニングを全教科に取り入れ、教科横断型授業やチーム・ティーチングに取り組み、学校行事・生活指導ともリンクさせている。

講師・指導員（順不同）

黒上 晴夫 関西大学総合情報学部総合情報学科 教授
山田 剛史 京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授
東山中学高等学校 学習力強化プロジェクト特別委員会委員
奥田 歆信 東山中学高等学校 校長
吉田 晋 富士見丘中学高等学校 理事長・校長
平方 邦行 工学院大学附属中学高等学校 校長
中川 武夫 蒲田女子高等学校 顧問
長塚 篤夫 順天中学高等学校 校長
広石 英記 東京電機大学工学部人間科学系列 教授(一般財団法人日本私学教育研究所 特別招聘研究員)

専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

清水 哲雄 学校法人鷗友学園 理事長
鈴木 弘 香蘭女学校中等科高等科 校長
北村 聡 京都外大西高等学校 校長
大多和 聡宏 開星中学高等学校 理事長・校長
助川 幸彦 蒲田女子高等学校 校長補佐
山本 与志春 学校法人青山学院 院長
川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長

研修会日程・プログラム

会場：東山中学高等学校

司会：川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長

8:30	受 付・資料配付	
9:00	開 会 式 【会場：講堂】 主催者挨拶 平 方 邦 行 一般財団法人日本私学教育研究所 副理事長 視察校代表挨拶 奥 田 勲 信 東山中学高等学校 校長(※福地信也 校長代行) 役員・専門委員紹介 研修会運営方針説明 清 水 哲 雄 一般財団法人日本私学教育研究所 教育課程専門委員長 日程説明	
9:30	基調講演 【会場：講堂】 演 題 「教育改革をとらえる視座 ～資質・能力の育成～」 講 師 黒 上 晴 夫 関西大学総合情報学部総合情報学科 教授	
11:30	昼 食	
12:30	【昼食会場：食堂】	
12:30	学校視察 司会：松本善人 東山中学高等学校 中学副校長 学校紹介・質疑応答 澤 田 寛 成 / 中 村 憲 幸 東山中学高等学校 教諭 【会場：視聴覚教室（中館 2F）】	
15:10	授業見学【5 限 13:15～14:05、6 限 14:15～15:05】 ○各自、自由に見学	
15:10	全体会（レクチャー） 司会：澤田寛成 東山中学高等学校 教諭 【会場：視聴覚教室】 テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』を組織的に進めるために」 講 師 山 田 剛 史 京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授 東山中学高等学校 学習力強化プロジェクト特別委員会委員	
15:45	分 散 会 テーマ：「『主体的・対話的で深い学び』をかなえる授業と評価」 視察校の先生方が参加し、質疑応答や情報交換を行います。	
	Aグループ 【会場：3年1組（北館3F）】 司会・指導助言：北 村 聡 京都外大西高等学校 校長	
	Bグループ 【会場：3年2組（北館3F）】 司会・指導助言：鈴 木 弘 香蘭女学校中等科高等科 校長	
	Cグループ 【会場：3年3組（北館3F）】 司会・指導助言：大 多 和 聡 宏 開星中学高等学校 理事長・校長	
	Dグループ 【会場：3年4組（北館3F）】 司会・指導助言：助 川 幸 彦 蒲田女子高等学校 校長補佐 中 川 武 夫 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・所長	
	Eグループ 【会場：3年5組（北館2F）】 司会・指導助言：清 水 哲 雄 学校法人鷗友学園 理事長	
	Fグループ 【会場：3年6組（北館2F）】 司会・指導助言：山 本 与 志 春 学校法人青山学院 院長 長 塚 篤 夫 順天中学高等学校 校長	
16:50	閉 会 式 【会場：視聴覚教室】	
17:00	総 括 清 水 哲 雄 専門委員長 解 散	

●概要●

6月21日、『主体的・対話的で深い学び』をかなえる授業と評価～ポートフォリオ・多面的評価の活用と課題～』を研究のねらいとして、東山中学高等学校（京都府京都市）で開催し、113名が参加した。午前には黒上晴夫・関西大学総合情報学部総合情報学科教授による基調講演「教育改革をとらえる視座～資質・能力の育成～」が行われ、午後に視察校の紹介、施設見学、授業視察を行い、続いて全体会で同校学習力強化プロジェクト特別委員会委員である山田剛史・京都大学高等教育研究開発推進センター准教授のレクチャーが行われた。その後、主に学校区分で6グループに分かれ、分散会を行い、参加者が課題を共有すると共に、交流を図った。



●開会式●

平方邦行・副理事長より主催者挨拶として「今後、私立学校は独自性を磨くだけでなく、子どもたちの未来のために学びの方向性や先進的なことを取り入れる等あらゆる面で改革していかねばならない」と述べた。次に福地信也・東山中学高等学校校長代行より視察校代表挨拶として「当研修会のテーマに『主体性』とあるが、本校では教育目標に『セルフ・リーダースhip』を掲げている。来て良かったと思えるような研修会にしたい」と述べた。最後に清水哲雄・専門委員長より「日本では大学入試改革等ははっきりしない問題が山積し、また、学習指導要領も改訂される。本研修会を通して、生徒のために本質に迫る教育活動のあり方を模索して欲しい」と研修会運営方針を述べた。



●基調講演● 「教育改革をとらえる視座～資質・能力の育成～」



講師 黒上 晴夫（関西大学総合情報学部総合情報学科 教授）

Society 5.0 で実現する社会では、IoT や AI により、知識や情報が共有され、必要な情報が必要なときに提供され、また人間の仕事が AI にかわり、より正確に行う。それが人間にとって幸せな社会かどうかは分からないが、今の子どもたちはその社会に出ていかなければならない。AI に職を奪われ、人が無職になることを避けることが今回の教育制度改革の背景にある。

高等学校学習指導要領について、現状は、日本の学力は世界トップレベルで、学力の差も少ないが、語彙・読解力や学習時間・意欲の不足、大学受験科目に絞り込んだ学習等の課題や問題点も山積する。教育環境は大きく変わり、タブレット端末等の先端技術が導入され、個別学習や協働学習、自己制御的な学習を支え、また自分の考えを表現する道具にもなっている。しかし、今の ICT 環境、特にネットワーク環境は脆弱との課題もある。さらに、子どもの安全確保の課題、特別な配慮が必要な生徒、勤務時間等多くの課題がある。それらを背景として、学習指導要領改訂のターゲットは、文章読解力の育成、教科固有の見方・考え方を中核に据えた学習内容の見直し、情報活用能力の育成、対話・協働による問

題解決学習となった。今回、高等学校では総合的な学習の時間は、「総合的な探究の時間」となり、「理数科」を新設し、「理数探究」が新設された。地理歴史科では「地理・日本史・世界史探究」、国語科では「古典探究」、そして「理数探究」、「総合的な探究の時間」と「探究」が多く出てきた。探究とは、課題を設定し、情報を収集、そして整理・分析し、まとめ・表現することである。そして課題について「振り返り」、「反省」を行い、次の段階へ進む。これは学年単位で進めず、1学期の間に2回、3回と繰り返されるとアクティブな探究が起こる。こまめに課題を更新させ、質的に高めることが必要である。

「探究」を教科の中で行うのが「探究」の付した教科である。各教科には教科書があるが、これらの教科はどうなるのか。教科書に探究すべき内容を掲載せざるを得ないのか。しかし、そうすると探究は起こらない。

新学習指導要領では「何ができるようになるか」とある。そもそも「何を学ぶか」が今までと違う。その中で重要なのは各教科で育む資質・能力を明確にすることである。

資質・能力は、これまで、「総合的な学習の時間」で、育みたい資質・能力を明確にすると書いてあったが、今回は汎用的な資質・能力と書いてある。子どもが社会に出た時、数学、社会科、国語の知識ではなく、全部で考える汎用的な思考が必要である。その場合、知識・技能は生きて働く知識・技能と捉える。思考力・判断力・表現力もその状況にも対応できる思考する力を付けるということである。それらを支えるものが「学びに向かう力」である。興味・関心・態度を「学びに向かう力」とした。

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」の3つ全部が育てるべき資質・能力である。「何ができるようになるか」とはこの3つができるようになることである。これまでは主に知識・技能中心で、身につけた知識・技能を応用問題・受験問題等に適用できる程度の思考・判断を要求していたが、レベルがより高度・広範になり、態度も主要事項となった。

全学習の基盤となる汎用的な資質・能力が指導要領総則に具体的に書かれている。1つ目は語彙、文法、フレーズ等の言語能力で、それらを使って全学習を行う。2つ目は情報活用能力である。これは全教科に関わると捉える。先生方がICTを活用して授業を行うのではなく、子どもに情報活用能力を身に付けさせる。3つ目は問題発見・解決能力である。探究を進めるための課題に関心事からテーマを作ることが多いが、関心事が無い場合は経験をもとにすれば、テーマを作ることができる。総則では「言語能力」、「情報活用能力」、「問題発見・解決能力」「等」と書いてある。「等」とは「考えるための技法（思考スキル）」である。

これらはすべて指導事項で、評価につながる。「知識・技能」、「思考・判断・表現」は評定となる。「学びに向かう力」、「人間性」も評定であるが、「感性、思いやり」などの「人間性」は個人内評価で所見となる。

「知識・技能」については、習得状況を記録して評価する。「思考・判断」では、それを活用して課題を解決している状況を把握する。論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の製作や表現等のポートフォリオを活用する。

「学びに向かう力」は学習を計画し、学習状況を把握し、改善するメタ認知のことである。計画や振り返りは、学習活動として作られる。単元が終わると、その単元を通して、学びの整理をし、他教科・生活が社会との関係を整理させたり、見通しをたてさせたりする。これは成果であり、成果物が残れば、それを評価の対象とすることができる。

このように進めていくと、観点別評価となる。質の評価なので、ルーブリック等が必要になる。

「知識・技能」は習得状況、概念化や身体化が測られ、筆記テスト・実技テストで測ることができる。「学びに向かう力」は、計画、振り返り、まとめ等で評価をして行く。

知識を使わせないとその力を使うことはできるようにならない。その場面を作るのがアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングの具体的な意味を明確に示すために、「主体的・対話的で深い学び」として示された。

「主体的な学び」は自分で計画を立て、自分で学習をコントロールして学ぶことであるが、一人ひとりが自

分の考えを持った状態から出発することが大事で、それが保障されなければならない。同時に、考えを表明する場を保障する。しかし、クラス全員が授業の中で、すべての子どもに自分の考えを述べる場を作ることは難しい。作れないのであれば上手く行う。例えば、シンキングツール等を使い、自分の考えを表明する環境があればよい。そうすると「主体的な学び」の要件が成立する。しかし、それより前に、自分の考えをもつとはどういうことか、そしてその方法を知っている必要がある。その場で求められている思考が、比較する、関連付ける、というような思考だということがわかって、そのためのやり方・学習方法を知っていると「主体的に学ぶ」気になる。それを助けるのが思考スキルやシンキングツールである。

「対話的な学び」とは自分の考えを他者や先人の知識等と比較しながら、更新することである。聞き比べそれを取り込み、考えの更新が起きなければいけない。自分の考えが変わったり、根拠が確かになったりする、あるいは考えを修正できる。他者と自分の考えを比べ、協働することを手順にくみこんだものがジグソー法である。皆が持っている知識を吐き出し、新しい課題を作っていく一方、シンキングツールを使えば、より簡単に皆の考えを同じ場に並べ、グループで考え方を作っていくことができる。

「深い学び」とは新しい知識が構造化され、経験・知識が結びつき、身体化されることである。

各教科の資質・能力を育成する具体的な実践はこれまでと何が違うかという点、「主体的・対話的で深い学び」の主体は学習者ということである。子どもに構造化・身体化をさせることにより、3つの柱が成立し、資質・能力を身につけさせることができる。

具体例をあげると、ある公立中学校では、いくつかの教科でグループ学習を進めている。自分たちで学習計画を立て、調べ、まとめ、発表しながら、学んでいく。自分たちで学習をさせていく中できちんと知識が身に付いていく。課題は出しておらず、先生がまずルーブリックを示し、シンキングツール等を使いながら、子どもが自分たちで学習を進めていく。それは学習の主人公が生徒に移っているということである。

シンキングツールについてであるが、「どのようにアイデアを発想すれば良いのか」、「どのようにアイデアを整理すれば良いのか」、「どのようにアイデアをつないでいくか」がシンキングツールの使い方と連動している。基本的な使い方を知った上で、実際の場面でシンキングツールを活用する。それによって、アイデアを共有して、考えをつくり出す流れが可視化され、やりやすくなる。

シンキングツールは、文部科学省では「思考ツール」と言うが、アイデアを可視化して並べるための道具である。どのように可視化するかを図形が教えてくれる（アフォーダンスという）。どのようなシンキングツールがあるかは、「シンキングツール考えることを教えたい」(http://ks-lab.net/haruo/thinking_tool/short.pdf)という小冊子をダウンロードして頂きたい。

シンキングツールはいろいろな思考スキルと対応している。思考スキルには、多面的にみる、比較する、見通す、関連づける等いろいろあるが、それぞれに対応している。その対応についても、この小冊子の目次に掲載している。

ところで、シンキングツールに表明されるアイデアは、まだ考えとは言えない。そのアイデアをもとに考えをつくり出すプロセスが、それに続く。つくり出された考えは、書かれたり説明されたりする。

シンキングツールを使うと、グループでの話し合いがスムーズになり、活性化される。自分のアイデアだけでなく、シンキングツールで共有された友達のアイデアも借りながら、考えをつくり出す。

学習においては、それが、評価の対象にもなる。まだ考えになっていないシンキングツールの上のアイデアや友達から借りたアイデアは、評価しても仕方がない。

ここで、シンキングツール活用時の留意点をまとめておく。まず、シンキングツールを埋めることを目的にしないことである。その先がある。

次に、シンキングツールには、思い付いたアイデアを、たとえ不必要なものでも書くのが大事である。使うかどうかは、後から判断すればよい。シンキングツールは、最終的な正解を書くためのものではない。

シンキングツールを視点にする場合があるが、「その他」は視点にしない。「その他」を視点にするのは、その視点が次の展開に必要なからである。「その他」は、むしろそれを妨げる。

シンキングツールにあまりアイデアを出せない子どももいる。だから、グループでアイデアを増やすのが大事である。

アイデアを共有して増やした後は、そこから考えをつくり出すプロセスを設ける。つまり、アイデアを出す課題と、考えをつくり出す課題は別ということになる。

ワークシートを使う時は、必要な時にシンキングツールに一度移って、そこでつくり出した考えをワークシートに書くと良い。

以上のことに注意してもらいたい。

考えの評価は、数量化できない。ルーブリックを設定して、質的に評価すべきだろう。例えば、「多面的にみる」ことを期待した際には、対象について多面的にとらえた説明は、自分の視点にだけこだわった説明よりも評価が高くなる。「理由付ける」際には、主張と根拠が論理的につながっている説明が、主観だけに依る主張よりも評価が高い。このような基準を、A、B、Cのような段階として子どもに示すのがルーブリックである。Aの上にS（スーパー）を設けると、ルーブリックを示す効果が高くなる。

最近、シンキングツールをデジタル化した。アイデアをカードに書き、そのカードをシンキングツールの上で整理できる。カードやシンキングツールはデジタルなため、複製や共有が容易にできる。あるシンキングツールでアイデアを出した後、シンキングツールを置き換えてアイデアを組み直したりすることもできる。また、履歴が残り、それを次の時間に使える。

「新センター試験、学びの基礎診断、e-ポートフォリオ等、教務としてどのような準備が必要か」という質問があったが、調査書は、試験官が見て加点する場合、学習内容や成果が詳細に書かれている方が多く加点される傾向がある。今まで所見欄は限られたスペースしかなかったが、これからポートフォリオが使われるようになるのしっかりと書いているかどうかが大きく影響するかもしれない。

「ポートフォリオと入試との関係について」（質問）は、AO入試等はすでに使われており、一般入試でどのように使うかは不明である。しかし多くの大学生がAO入試や推薦入試で入学し、その際、ポートフォリオを使うことになるため重要となる。

探究のプロセスを考える時に使えるように探究マップを作った。ネットでダウンロードして頂きたい（小中学校用のみ）(http://ks-lab.net/haruo/inquiry/inquiry_map_jr.pdf)。

課題設定した後に調べ学習が始まる。調べ方もいろいろある。文献、インタビューやアンケート、現地調査、実験等である。調べて、情報を集めた後、何をするかを学ぶ必要がある。例えば、インタビューであれば、聞いた内容を書き起こす。そして、情報を集計し、整理（グループ分け等）をする。それをもとに、グループ等での傾向を読み取り、特徴の違いがあるとその理由を検討する。そのようなプロセスを経て、ようやく自分たちの主張をまとめるに至る。調べた後にこのようなプロセスがある。そこから逆算してインタビュー・フォームを作ったり、アンケート・フォームを作ったりすることが重要である。ここでもシンキングツールが使える。観察調査、実地調査を行っても、調べた情報をどのように証明、整理するかがあらかじめ想定されていなければならない。イメージし、分析の仕方を考え、意見を作ることが大切である。

このようなことを、「総合的な学習」、「総合的な探究」の時間で扱って頂き、基本的な知識として身につけることが重要である。これができれば、大学入学後も、レポートや卒論を書くことに役立ち、社会でも役に立つであろう。

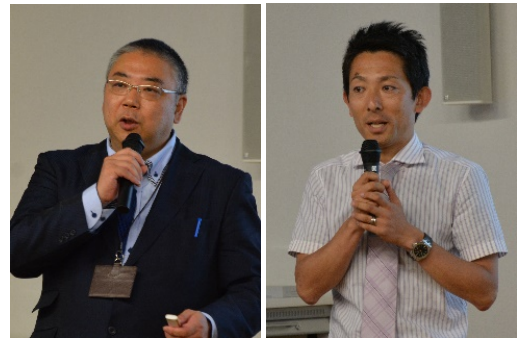
●学校視察●

午後からは会場校である東山中学高等学校の学校視察を行った。

まず、澤田寛成・企画広報推進室長より事前質問に回答する形式で、同校の特色である三大ツール（10年カレンダー、生徒手帳、3年日記）を活用した「セルフ・リーダーシップ」や仏教の教えを基にした「土台力」等が説明された。

続いて、中村憲幸・教諭より同校における授業デザイン（授業におけるアクティブ・ラーニングの活用法）の工夫について説明された。

その後、それぞれの5・6時間目に行われた授業が公開され、様々な教科の授業を参加者が自由に見学した。以下の通り、複数の授業ではAL授業が公開された。



【AL公開授業一覧】

第5限			
No.	学年	教科	授業者
1	高1	国語	九野里 信夫
2	高3	公民	竹村 直樹
3	高3	地歴(世界史)	福井 真
4	中3	数学	谷井 俊宏
5	高2	数学	澤田 寛成
6	高1	理科(化学)	藤嶋 雄大
7	高1	体育	中根 雅貴
8	中2	英語	森 将哉
9	中1	英語	諸角 慧
10	中2	英語	山向隆&堀井武
第6限			
No.	学年	教科	授業者
1	中1	国語	光田 香住
2	高3	公民	竹村 直樹
3	中3	数学	山本 晃弘
4	中1	数学	桑田 勝矢
5	中3	理科	田中和 大
6	高3	体育	中原 大亮
7	高1	英語	中村 憲幸
8	中3	英語	市村 道久
9	高2	情報	高畑 祐輔

●全体会（レクチャー） ● 「『主体的・対話的で深い学び』を組織的に進めるために」



講師 山田 剛 史（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授）

主体的・対話的で深い学びを組織的に実現するために、学校としてどのように進めていくかについて同校学習力強化プロジェクト特別委員の山田剛史・京都大学高等教育研究開発推進センター准教授からレクチャーが行われた。

視察校への参加者事前アンケート質問に回答していく流れで話は進められた。

主体的・対話的で深い学びは、知識を取り入れたり、関連づけたり、考えたりすることと、書いたり、発言したり、発表したりすること、すなわち「内化と外化」と、それらの営みを一人でやるか他人と一緒にやるかという「個と協働」とをいかに組み合わせて展開していくのが重要である。また、ICT等のツールを使えばアクティブ・ラーニングになるという誤解が多いが、教育技法やツールではなく、生徒がどのように学んでいるかが重要である。

今後求められる教師の役割は、知識を伝える伝導者ではなく、生徒自身が自分の頭で考え、表現できるような学習環境を提供する推進役・調整役である。

これらを踏まえて、個々の教員の自助努力に委ねるだけではなく、学校全体で組織的に取り組んでいくことが求められる。そのためにも、自身の学校ではどの程度の教員が適切に理解し、積極的に実践に取り組んでいるのかを把握することも重要である。

以上のレクチャーの後、東山中学高等学校で取り組んでいる組織改革、教員研修等の概要を説明した。

●分散会 ● 「『主体的・対話的で深い学び』をかなえる授業と評価」

参加者は学校区分等（大学附属校、大学附属校以外、管理職）で6グループに分かれ、①ポートフォリオの活用と課題、②「主体的・対話的で深い学び」・「アクティブ・ラーニング」の実践（入試対策を含む）、③多面的評価の活用と課題、④ICT 活用の実践について、自校の事例紹介や問題提起等を行いながら情報交換を行った。



各グループの司会・指導助言は、清水哲雄・専門委員長（学校法人鷗友学園理事長）、鈴木弘・専門委員（香蘭女学校中等科高等学校校長）、北村聡・専門委員（京都外大西高等学校校長）、大多和聡宏・専門委員（開星中学高等学校理事長・校長）、助川幸彦・客員研究員（蒲田女子高等学校校長補佐）、山本与志春・客員研究員（学校法人青山学院院長）及び中川武夫・理事／所長、長塚篤夫・理事（順天中学高等学校校長）の8名が行った。また、各グループには視察校の先生方も3名程度加わった。参加された先生方全員が積極的に参加できるように小グループを編成したり、全体を通して情報が共有できるように時間を決めて一言ずつ発言を頂いたりして、短い時間であったが、各グループが工夫しながら進化した。

●総括・閉会式 ●



最後に清水哲雄・専門委員長より一日の研修会の総括として、「問題を教員間で言語化・見える化し、共有することが大切である。ぜひ分散会でできたつながりを大切にして、交流を続けて頂きたい。」と述べ、閉会した。

●参加者アンケートより● 回答数：91名／参加者数：120名（回答率75.8%）

○当研修会への参加動機

多面的評価やポートフォリオ、アクティブ・ラーニングの具体的な実践・導入方法、総合的な探究についての関心、他校との情報交換、学校視察が主な参加の動機となっていた。

○基調講演についての感想

新しい学力の考え方と資質・能力の三つの柱、主体的・対話的学びの捉え方といった概要の説明から、具体的に「探究」をどのように教員全体の認識を合わせるか、自身の授業をどう探究していくか、ルーブリックやシンキングツールの活用法と実践例等々具体的な例も交えた講演に加えて、事前質問に対して明確な説明を行われ、「理解が深まった」、「大変勉強になった」、「大きなヒントを頂いた」等の意見が多かった。また、web上に資料を掲載するという試みには「共有しやすい」といった好意的な意見があった。

○学校視察（東山中学高等学校）についての感想

AL（アクティブ・ラーニング）公開授業は好評であった。また、「伝統を守りつつ新しい手法を取り入れ、先進的で素晴らしい」、「生徒が生き生きしている様子が印象的だった」、「若い先生がより積極的に活動されている印象があった」、「志の高い先生方の熱を感じた」、「学校として組織的に改革に取り組んでいる姿に感銘を受けた」といった感想があった。

○分散会についての感想

各グループとも実践や課題、悩みを共有し、情報交換が行われ、さらに東山中学高等学校の先生も参加した当分科会は大変有意義であったという感想が多かった。協議された内容にはアクティブ・ラーニングの実践、評価・ポートフォリオについて、探究授業について等が挙げられた。一方、「1時間では少ない。もっと時間を取り、先生方のお話を聞きたい」、「もう少し時間があれば、もっと議論が深まったと思う」、「議論すべきテーマを設定しても良かった。わずかな時間しかないので焦点を絞らないと議論が広がってしまう」、「質問形式で行った方が良い」といった意見も見られた。

○研修会全体についての意見・感想

「AL（アクティブ・ラーニング）を多面的に考えられたのが良かった」、「山田先生のレクチャーにおける教育改革の話が大変参考になった」、「今年の授業やカリキュラム・マネジメントに活かせると思う」等好意的な感想が多かった。また、分散会の時間がもっと必要といった意見や、「評価」についてももっと話を聞きたかったという意見も多かった。

○今後の研修会への希望

●会期

現状と同時期の希望が多かったが、夏季休暇や10～11月等の開催を希望する声もあった。

●開催地

東京での開催を希望する声が多いが、関西や九州等西日本での開催を希望する声があった。

●取り上げて欲しいテーマや具体的な研修内容等

引き続き、評価・ポートフォリオについて、高校の新学習指導要領の対応について、総合的探究の時間やカリキュラム・マネジメントの具体的な実践例、ICT活用が進んでいる成功例のある学校の視察、発達障害と学習支援を取り上げてほしいという声があった。

都道府県別参加者数

No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数
1	北海道	3	17	石川	0	33	岡山	1
2	青森	1	18	福井	2	34	広島	7
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	1	20	長野	1	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	2
6	山形	0	22	静岡	1	38	愛媛	3
7	福島	0	23	愛知	13	39	高知	1
8	新潟	1	24	三重	1	40	福岡	8
9	茨城	3	25	滋賀	3	41	佐賀	0
10	栃木	0	26	京都	4	42	長崎	3
11	群馬	1	27	大阪	9	43	熊本	2
12	埼玉	1	28	兵庫	9	44	大分	1
13	千葉	4	29	奈良	2	45	宮崎	1
14	神奈川	5	30	和歌山	0	46	鹿児島	1
15	東京	11	31	鳥取	4	47	沖縄	0
16	富山	1	32	島根	1			
							合 計	113
							参加都道府県数	35

教科別参加者数

教科	人数
数 学	31
理 科	15
国 語	14
英 語	13
地歴公民(社会)	13
そ の 他 ※	9
管 理 職	18
計	113

(※保健体育・商業・工業・家庭科・宗教・情報)